

パネルディスカッション
非認知能力と子どもの日本語の学習・教育—アイデンティティを捉え直す—

本パネルディスカッションの趣旨

浜田麻里（京都教育大学）

1. パネルディスカッションの目的

子どもの日本語教育研究会の研究・企画委員会の2つのプロジェクトのうち、プロジェクト B では、「参加とことば」をテーマに研究と実践をつなぐ活動を行っている。

今期は「非認知能力」に注目して「参加とことば」について考える。認知能力は知識や思考力等、いわゆる「勉強ができること」であり、非認知能力はそれ以外の能力である。この非認知能力は、人が幸福な人生を送るために認知能力以上に重要な能力であるとして、最近 OECD でも注目されている。

本パネルディスカッションでは、非認知能力が「参加とことば」にどのように関わっているのかを考えることを通して、教育や支援の次の一歩への示唆を得たい。

2. ノートンのアイデンティティ理論

プロジェクト B では非認知能力について知るためにいくつかの文献を読んだが、その中でメンバーが強く興味を引かれたのが公開読書会でも取り上げたボニー・ノートン『アイデンティティと言語学習—ジェンダー・エスニシティ・教育をめぐる広がる地平』（2023年、明石書店）であった。

ノートンは非認知能力の一つと考えられる「動機づけ」について「アイデンティティへの投資」という新たな見方を提示した。またアイデンティティは、周囲とのやりとりの中で交渉されるものとしている（詳細は本パネルディスカッションの中山発表を参照）。これらの考え方は、社会への参加における言語コミュニケーションの在り方について大きな示唆を与えてくれるのではないかと思われる。

しかし、ノートンの研究は成人移民女性のエピソードを元に構築されている。子どもの場合は、成長発達の途上にあり、また大人とは異なる社会的関係性や力関係に置かれている。子どもたちの文脈における「参加とことば」に、非認知能力が与える影響を考えようとするとき、ノートン理論は我々にどのような示唆を与えてくれるのだろうか。

3. パネルディスカッションの構成

本パネルディスカッションは以下のように構成される。

(1) 中山垂紀子（広島大学人間社会科学研究科）

「ボニー・ノートンのアイデンティティ概念—議論の前提として—」

(2) 立山 愛（別府市教育委員会 日本語指導員）

「教室において変容するアイデンティティと教育的介入の可能性

—中学生アナのダイアリーを通して見えてくるもの—」

(3) 河野あかね（つくばインターナショナルスクール）

「日本語学習における子どもの葛藤の背景にあるもの

—子どもの日本語学習に対する保護者の葛藤—」

(4) 赤松大輔（京都教育大学）

「非認知能力の発達について—動機づけ研究の観点から—」

パネルの始めにまず『アイデンティティと言語学習』の翻訳者である中山の紹介によりノートン理論の概要を確認する。続いてプロジェクト B メンバーの立山、河野が実践の中で出会った事例をノートン理論に関連付けながら報告する。さらに赤松が心理学分野での動機づけ研究を紹介するとともに、動機づけ研究に照らした事例の読み解きを行う。

理論研究や事例研究を踏まえ、子どもの非認知能力の発達をも視野に入れたうえで、子どもたちのことばを媒介とした社会参加を実現するために、どのような教育や支援が求められるのであろうか。本パネルディスカッションでは、来場者全員が自身の実践に引きつけて検討できればと考えている。